

塑造家としてのヤコポ・デッラ・クエルチャ
——ルネサンス塑造研究再考——

松本 悠子 (慶應義塾大学)

テラコッタを古代以来初めて人物像制作に本格的に用いた芸術家としてドナテッロを評価するベッローシの研究を嚆矢とし、現在テラコッタを始めとする塑造の研究が盛んに行なわれている。その中でも初期ルネサンス、とりわけ15世紀初頭のフィレンツェには、こうしたテラコッタ塑造の復活、大規模なブロンズ工房の運営、契約あるいは制作過程における塑像モデルの導入が成されたと理解されていることから、彫塑研究史上重要な位置が与えられてきた。

一方、大理石による大規模なモニュメント、また数多くの彩色木彫を手がけたことで知られているシエナの芸術家ヤコポ・デッラ・クエルチャ(1373年頃-1438年)は、もっぱら彫造家(カーヴァー)として評価されてきた。シエナ洗礼堂におけるブロンズ浮彫が1点知られているとはいえ、塑造家(モデラー)としての活動は見過されてきた。それは主に3点の理由による。すなわち、彼に帰属されるテラコッタやブロンズといった塑造による作例の少なさ、彼が契約資料として塑像モデルではなく素描を用いたという事実、そしてルネサンス最大の彫造家ミケランジェロの先駆としてのヤコポの史的立場づけである。しかし、ルネサンス芸術における塑造の重要性が見直される中で、ヤコポと塑造という問題に対しても再検討の必要があると発表者は考える。

そこで、本発表では失われた塑像の存在を想定し、彫像制作時にヤコポが塑像モデルを活用した可能性を提示する。こうしたモデルは契約素描とは異なり史料づけられることが少ない。しかし、彼がその活動の大半においてシエナやルッカ、ボローニャといった複数の都市で同時に工房を運営していた事実、これらの石彫群に見られる「捻塑的造形」は、作家が作品の構想用や工房内での分業用に塑像モデルを用意したことを考えさせる。この仮説は、ヴァザーリが「ヤコポ伝」の中で語った粘土製騎馬像についての記述と重要な一致を見せる。ここで彼が行なった「大型モデルの考案者」としてのヤコポの位置付けは、ミケランジェロに影響を与えた大理石作家としてヤコポを強調する研究史の中で見落とされてきたが、ミケランジェロによる塑像モデルの活用が明らかになった今日、この16世紀の記述に改めて注目する必要がある。このように想定されるヤコポの塑造体験は、2005年に再発見された等身大のテラコッタ像《告知を受けるマリア》(ノルチャ、カステッリーナ美術館)が示す高い塑造技術によっても裏付けられる。

ヤコポ・デッラ・クエルチャの塑造活用を積極的に想定することは、彼の造形表現に対する解釈を広げ、その工房運営の在り方を提示するという意味においてのみならず、15世紀前半のイタリア彫塑史におけるシエナ芸術の再評価という近年の研究動向に対して新たな視点を提供するという意味においても意義深いと考える。